# 化猫

阿万

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
化猫

【Ｎコード】
Ｎ１０７２Ｘ

【作者名】
阿万

【あらすじ】
窓の外の怪物を見て以来、俺の周りで異変が起こり始める……。

## いち

賀川麗奈（れいな）と別々の大学になり、俺は自分の彼女と遠距離恋愛になってしまったのを悲しんでいた。麗奈は俺の全てだったが、東京の有名私立大学に進学した彼女は俺との別れを偲んでこそいるが、東京生活が楽しみで仕方がないように見えた。

麗奈が東京に行く前日、俺たちは行きつけの店で食事をし、それから別れ際にキスをした。二年付き合ったがとうとうキスどまりだった。清楚な雰囲気の彼女は見た目通り、性交を求めなかった。こちらから誘ったこともない。彼女がそうした空気にさせないせいもあった。だが、今時の高校生の男女が交際してキスだけで留まるというのもどうなのだろう。俺は地元の平凡な大学に通いながら悶々とした日々を送った。後悔だけが押し寄せる。胸ぐらい触っておけばよかった。いや、無理やり行為に持ち込んでしまえば。だがあのときは純愛で、そんな空気ではなかった。

ランニングやジムに通って筋肉を鍛えることで俺はそんな鬱屈を晴らそうしたが、難しかった。麗奈にメールを日に何度もした。俺たちは交際していたとき以上にメールをしあった。電話もかけた。彼女は相変わらず、落ち着いた声で、それでも楽しげに近況を喋ってくれた。

電話を終えると虚しくなる。麗奈の大学生活に俺の入る余地はあるのだろうか。恋人だったが、今も変わらず恋人なのだろうか。休日に会おうとメールした。こちらから赴くと言った。しかし彼女はバイトやサークル、課題で忙しいと会う約束はしてくれなかった。

俺の、俺だけの麗奈。二人で公園で散歩し、ひと気のない並木道でキスし、互いの愛情を確認した。楽しかった日々。今となってはただの幻だったような気がする。元々、内向的で目立たない麗奈だったが長い黒髪の艶、色白で整った顔立ちで男たちにはもてていた。

そんな麗奈だ。高校生活だけでも一緒だっただけ幸せだったのか

もしれない。
大学生活はそれなりだった。コンパで散々飲み、酒ばかり強くなった。楽しいが、虚しかった。そこに麗奈がいない。それだけで、何もかもが虚しかった。
メールを彼女に送る。最近、メールが返ってくる頻度が落ちた。送っても三時間ほど経ってから返ってくる。ひどいときには一日経つか、或いは返事無しだ。電話にも出てくれなくなった。盆休みに帰郷するのとメールしても、合宿があるから帰らないらしい。それでも俺はそう返事が返ってくるまでましかとも思った。悲しいが、それが現状だった。

**に**

日々は過ぎる。最近、同じサークルの子で仲のいいのがいる。鮎(あ)原美伽(ゆはらみか)。麗奈とは対象的で明るく積極的な女子だった。髪は茶のセミロング。麗奈のような清楚な雰囲気ではないが、陽気かつ妖艶な雰囲気があり、またスタイルもよかった。

「日曜日にドライブでも行こうよ。ディズニー辺りまで」

最近よくデートに誘われる。俺はどうしようか迷った。

「麻里子か智治たちも誘うのか？」

「えぇ、二人だけで行こうよ」

「あーでも俺、用事あるんだよな。高校の同窓会があってさ」

「何それ。だったら最初から言えばいいのに」

「ごめんごめん。お詫びに今日ボーリング行こう。そのあと飯奢るから」

美伽はちょっと不満そうな表情をしたが、それでも一応納得したらしい。

「わかったよ。それで手を打ってあげる」

「今日は俺が勝つぜ」

「無理無理。剛(たける)ガーターするもの。じゃあ、終わったら電話頂戴」

俺は去りゆく美伽に手を振った。やれやれと思う。すっかり彼女気取りだ。多少の嬉しさはあるのだが。美伽は好きだ。一度キスもしたが、酔った勢いだと思う。それ以来美伽は俺を特別視してる。俺はまだ積極的な彼女と深い仲になっていいのか決めあぐねていた。

「美伽とデートするの？」

美伽が去り、今度は工藤先輩がきた。工藤美月(みつき)。サークル仲間であり、俺が少し憧れている先輩。彼女は麗奈のような黒髪をポニーテールにしている。だからだろうか、落ち着いているが、活発な印象がある。白い肌はいつも透き通るようで、その美しい肌と端正で純粋そうな顔立ち。麗奈と同じような清楚な雰囲気を漂わせている。

「いえ、ボーリングですよ。麻里子たちも誘おうかと思ってるんですけどね」
「二人でいけばいいのに。美伽喜ぶよ。彼女は飯田君一筋だから」
「俺は違いますよ。美伽は好きですけど、なんだろうな……俺、女々しいんです」
先輩は首を傾げた。麗奈のことは言っていないのだ。先輩にはわからないだろう。
「先輩も今日ボーリングいきませんか？　大人数のほうが楽しいんで」
「あたしボーリング苦手だからまたにするよ。じゃあね。なんか、悩みがあったら先輩に相談しなさい」
先輩はお姉さんぶってそう言ったが、実際先輩は大人びていて、身体付きも実に悩ましく、俺は彼女の後ろ姿を見ると激しい衝動に駆られる。だけどすぐに麗奈の笑った顔が脳裏に浮かび、罪悪感のようなものを抱いてしまう。
情けなく、そして寂しい気分。やはり美伽だけじゃなくサークル仲間も呼ぼう。今夜は麗奈の顔を忘れるほど飲みたかった。

## さん

俺は酒が強くない。ビール三杯程度でもう限界になった。具合が悪くなったので店を抜け出してアパートに戻る。部屋に行き、少し落ち着く。パソコンにレンタルしているブルーレイディスクを入れる。昨日途中で中断した洋画で、ホラーものだった。洋館に迷い込んだ七人が化物に襲われるという、単純だがなかなかに不気味で、演出が凝っていて見ていてぞくっとできた。

映画にはまっていたとき、窓から音がした。風による振動だろうか。それにしては強かった気がする。

雨が振ってくる音がして、俺は納得した。横雨が窓に当たったのだ。

映画のクライマックス。俺は一人で主役に感情移入して盛り上がっていた。映像の化け物は恐怖そのもので、身の毛もよだつ姿形をしている。化け物は人を取り込み、その人間に似た、別の何かになる。

また窓を叩く音。今度は雨の音と明らかに違う音だった。

おや、と思って映画を一時停止し、窓のほうをみた。

叩く音が聞こえる。間違いない。誰かが、窓を叩いている。カーテン越しにはっきりと聞こえる。

緊張する。俺の部屋はアパートの三階なのだ。そしてその窓にはベランダもない。誰かが叩くなんてありえないはずだ。

意を決し、カーテンを一気に開けた。そして俺は窓の外に不気味な姿を見た。

人のようでいて、人でないものが窓の奥にいた。茶色く、汚らしく伸びた髪。尖った耳。黄色い、爬虫類のような目。裂けた口から見える長い犬歯。

大部分を毛に覆われているようだが顔はさほどでもなく、肌は人間のように白かった。五本の指先の爪は鋭く、汚い黄土色をしてい

た。それがどれも長く伸びていた。
俺は絶叫するかと思ったがしなかった。そのかわり絶句し、後ろに下がろうとして椅子から落ち、尻餅をついた。立ち上がって逃げようとしたいのだが、腰が抜けたのか体が思うように動けない。
醜悪な化物は憎々しげな目でこちらを睨みつけ、そして激しく窓を二度叩き、そして消えた。
暫く動けなかった。思考は停止し、圧倒的な恐怖を感じたままそのままの状態で三時間過ごした。やがて俺はそのまま意識を失った。

## よん

目が覚めると気分が悪く、俺は大学を休もうかと思ったが、窓を見ると家にいる気にはなれず、外にでた。

――あれは幻覚だったのだろうか。俺は思う。それとも誰かの悪戯？　どちらでもいい。あんなことが現実にあるとは思えないんだから。

大学では再び美伽に絡まれた。彼女は俺がいつもどこにいるのか把握しているようで、一人になりたいときにも見つかってしまう。キャンパスは広いし、学生も多いのによく見つけるものだ。俺は妙に感心してしまう。

「何してんの？」

「別に」

「なんか顔色が悪いみたいだよ」

「ちょっと調子悪いんだ」

嘘ではない。あの化物の目を思い出すと、気分が悪くなる。

「帰る？　送ろうか？」

家には帰りたくなかった。そういえば美伽もアパートで一人暮らしだ。彼女の部屋に泊めてもらうことはできないものだろうか。だが俺はためらい、結局家に帰ることにした。寝室に行き、寝る。今日は寝ていよう。少しだけ寝ていると、携帯が鳴ったので俺は開いた。

麗奈からだった。

俺は目を疑った。だが間違いなく、麗奈からの電話だ。震える手で俺は通話ボタンを押した。

「もしもし」

「剛君？」

賀川麗奈の懐かしい声が耳元に心地よく聞こえてくる。間違いなく麗奈の変わらない声だった。

「久しぶり」俺はなるべく抑揚のない声を出した。ここで嬉しそうにしたら情けないような気にもなったが、それを隠すことはできそうもなかった。俺は舞い上がっていた。
「うん。久しぶり。どう、元気にしてる？」
俺は彼女の言葉に苛立ち傷ついた。まるで長らく会っていない友達に声をかけるかのようだ。恋人という関係は続いているのだろうかという俺の疑問と期待はかなり減少した。だが彼女は何故俺に電話してきたのだろうか。
「普通だよ。で、なんか用か？」
かなり冷たい言い方だったのかもしれない。電話越しの声は沈黙している。
「……剛君の声が聞きたくて」
彼女の声は押し殺したようような調子で、俺は緊張していた。
「そっか」
「今ね、こっちに帰ってるの。だから、逢えないかなって」
「ああ。行くよ」
場所は麗奈の家。俺は嬉しすぎて、思わず小躍りしたくなるほどだった。身支度をし、ヒゲをそり香水をし、家をでて車で麗奈の家に急ぐ。復縁、あるいは恋人関係の再開。俺はそんなことを期待していた。

ご

麗奈の家まで車を走らす。麗奈の家までの道ははっきりと記憶していた。家の前に車を横付けし、俺は久しぶりの麗奈の家の玄関先に立ち、おそるおそるチャイムを鳴らす。
ドアが開き、カーディガン姿の彼女が現れた。
「剛君」
俺はいきなり麗奈に抱きつかれた。麗奈の身体は以前よりさらに大人になったようで、俺は彼女の豊満な肉体に戸惑いつつも、その体付きに性的興奮を覚えた。麗奈が離れる。
「頭染めたんだ。似合ってるよ……体も逞しくなったみたいだね」
「麗奈は変わらず黒髪だな。だけどちょっと垢抜けた」
本心だった。彼女の雰囲気は都会人的で、顔は前よりも表情豊かになったようだ。相変わらず、美人だった。
「ここじゃあれだし、食事でも行くか？」
「うん。いつものところがいいな」
いつものところとは麗奈がこっちにいたころしょっちゅういっていたレストランだ。麗奈はパスタが大好きだった。
車に麗奈を乗せ、俺たちは憩いのレストランに向かった。隣に麗奈がいる。それだけで俺は天にも昇る思いだった。
レストランで俺たちは離れている溝を埋めるかのように互いのことを話し合った。久しぶりだったが会話は盛り上がり、俺と麗奈は昔のように穏やかな雰囲気に包まれた。
レストランを出ると夜景を見に山へいった。そこから見る街の灯りは綺麗で、俺は是非彼女に見せたかった。
「綺麗だね」麗奈は言った。
「だろ？」
夜風に髪をなびかせる彼女は美しかった。おれは彼女の手を握った。彼女は拒まず、握り返してくれた。　そして彼女は俺に頭をも

たげてきた。
「帰ってきてよかった。剛君と逢えないのは辛かったから」
「俺も辛かった。いつまでこっちにいるんだ？」
「日曜日まで。休暇を取ったんだ。単位は足りてるから、いいかなと思って」
俺に会うために戻ってきたのだろうか。俺は嬉しくて彼女の肩を抱いた。彼女の温もりが心地よかった。
「さて、そろそろ帰らないと」
「まだ早くないか？」腕時計はまだ七時前だ。
「うん……同級生とちょっと約束があるんだ」
残念だった。俺といるより同級生との約束を取るなんて。
「わかった。送るよ」
俺は麗奈を家まで送った。
「明日も会えるかな？」
「もちろん」俺は即答した。
「また電話するね。ありがと」
麗奈は俺にキスをした。濃厚で、甘いキスだった。永遠のように長く幸せな時間だった。唇が離れると俺は物足りない気持ちになる。
「じゃあね」
麗奈は家の中に入り、俺は名残惜しいが車を出した。

## ろく

彼女の唇の温もりが忘れられない。麗奈は帰ってしまう。そしたら、また会えなくなるかもしれない。今度こそ二人の仲は思い出として残るだけになってしまうかもしれない。

そんなのは嫌だった。

麗奈を抱きたい。麗奈をもっと深く感じたい。彼女が遠くにいても、彼女の温もりを覚えていたい。

二人の仲をつなぎ止めるには、本当の意味での男女の仲になるしかないのではなかろうか。だが、まだキスしかしたことがないのだ。この短期間に肉体関係にまで持ち込むことができるだろうか。

メールがきた。明日は何時に会えるかという内容だった。大学を休んでしまおうか。彼女の都合に合わせよう。いつでもいいよと返信する。

返事は帰ってこなかった。

俺は化け物の顔を思い出し、窓を確認した。閉めてある。窓をつき破られない限り化物は入ってこないはずだ。しかし一体、あの化物はなんなのだろう。

結局返事はこなかった。俺は寝た。

次の日、大学に行くのに車を走らせいつもの道を走っていると、左手に見える公園に会えるパトカーが数台止まっているのが見えた。俺はなんだろうと減速で進み、救急車に血塗れのセーラー服の少女が搬送されようとしているところを目撃した。少女はぐったりして動かない。死んでいるのだろうか。

何だろう。公園で何があったのか。事件性を感じる。ゆっくり走っていると後ろの車に煽られた。俺は仕方なくスピードを上げた。

大学ではやはりその話で盛り上がっていた。場所が大通りだ。目撃した者も多いだろう。

何故だろう。俺は嫌な予感がした。そういえばあの公園は俺の家からさほど離れてない。麗奈の家ならもっと近い。
「事件だよ！　たけちゃん」
美伽に耳元で叫ばれた。
「ああ。女の子、大丈夫なのかな？」
「わかんない。でもパトカー結構止まってたね。なんか爪で引っかかれたような傷なんだって。噛み傷もあるみたい」
「大型犬にやられたのか？　まさか熊ってこともないだろうし」
「犬かなんかだと思うけどね。でもちょっと爪の傷痕が太すぎるんだって。相当大きな犬ってことかも」
随分事情通だと俺は感心する。
「美伽も気をつけたほうがいいぞ。可愛い顔が台無しになるから」
「ありがと。じゃ、またね」
俺の言葉に照れたかのか、はにかみながら笑う彼女は可愛いかった。
携帯電話が震えたので画面を見ると麗奈からのメールだった。内容を見ると今日はいつ頃あえるかというものだった。麗奈はいつでもいいようだ。
やはり今日は帰ろう。麗奈が俺を求めている。彼女とより深い仲になるのなら、すぐに会いに行くべきだ。
肩を叩かれる。振り向くと工藤先輩が立っていた。
「おはよう」
「おはようございます」
「なんか最近変な事件多いけど、こんな街中で獣害があるんだ。飯田君も気をつけなよ。家、近いんでしょ」
「まあ……でも先輩も気をつけてくださいよ。美人は狙われますからね」
「ありがとう。でもそれは人間相手でしょう」
「動物も美人のほうが好きなんですよ」
「そうなんだ」

なんだか工藤先生は嬉しそうだ。俺が美人だといったのは本心だが、笑顔の工藤先輩は実に魅力的だ。俺は先輩のことがたまらなく愛しくなるときがある。だが、麗奈だ。俺の可愛い彼女が俺を呼んでいる。今は先輩のことは後回しだ。

「じゃあ先輩、俺用があるんでまた」

「あ、飯田君」

立ち去ろうとしたが、呼ばれて振り向かえる。

「今度二人で食事でもどうかな？」

「是非行きますよ。後でまた詳しく」

「またね」

先輩は俺を誘ったのだろうか。ただの仲間同士の親睦を深めるため？　しかしさっきの先輩の顔は可愛いかった。初めての告白のようで、少し緊張した感じ。俺は麗奈のところに向かいながら、工藤先輩の顔が頭から離れなかった。

## なな

麗奈は家にいた。いきなりの訪問に彼女は少し驚いた様子だったが、嬉しそうにしてくれた。そして俺は彼女の部屋に上がった。

麗奈の部屋には二回きたことがある。今回で三回目だが、質素なものだった。

「こんなに殺風景だったっけ？」

「もうこの部屋にはあまりいないからね。大学卒業しても東京で就職するし」

俺はショックを受けた。麗奈がいってしまう。

「じゃあ、あんまり会えないな」

麗奈は俺の手を握った。俺は彼女の手の温かみを感じた。

「離れていてもいっしょだよ」

麗奈が東京に行く間際にも言った台詞。俺はそれを信じてきた。だが今はわからない。麗奈はあまりにも俺をないがしろにしすぎる。

目が合う。キスの合図。互いの唇を重ね合う。互いの唾液を味わい、舌の感触を楽しむ。

俺はたまらなくなり、セーター越しに胸を触った。ふっくらとした感覚だがブラジャーは邪魔だった。俺はセーターの中にてをつっこみ、ブラの中に手を入れて彼女の胸を触り、揉み、乳首をいじり、つまんで楽しんだ。

麗奈が俺の頬を両手で掴んでキスをする。

「誰もいないから大丈夫。抱いて」

俺は欲望の赴くまま、彼女の服を脱がし、パンツの中を弄り、そして下着も脱がすと、自分も服も脱ぎ、彼女の陰部を散々楽しんだのちに怒張したものを彼女の中に入れ、まだ不慣れながらも結合の快感に酔いしれた。

## はち

一度風俗にいったことがある。あのときは緊張しながらも初めて女の裸体をいじれるのが楽しかったが、果てた後に虚しくなり、そして罪悪感が残った。その頃から麗奈とは疎遠気味だったが、まだ彼女のことを信じていた。

今初めて好きな相手を抱いた。最高の気分だった。なんだか自分が別の存在になったような、素晴らしい気分。世界を征服したようなそんな気持ち。

「好きだよ」俺は言った。

「あたしも」

麗奈はすごく嬉しそうに俺の頬にキスをした。

俺は満足していた。念願がこうもあっさりと叶うとは。

考えてみれば彼女もこの展開を望んでいたのかもしれない。そうとしか思えない。

そのとき俺は幸せで、麗奈が東京に戻るまで幸せだった。ただ引っ掛かるのが、彼女とセックスした日から彼女は会ってくれれず、そのまま東京に帰ってしまったことだ。送ったメールの返事も返ってこない。電話もでない。俺は訳がわからず、日曜日に彼女の家に出向いたが、チャイムを押して出てきたのは彼女の母親だった。

「麗奈はもう東京に戻ったの。ごめんなさいね。麗奈から聞いてないの？」

麗奈の母親はどこか俺を憐れむような目で見た。

「そうなんですか失礼します」俺は相手の質問に答えずにその場を離れた。

わからない。麗奈のことがわからない。彼女は俺のなんなのだろう。何か事情があるのだろうか。何か妙なトラブルにでも巻き込まれているのだろうか。

俺には何もかも不明だった。ただただ、苛立ち、そしてひたすらに悲しかった。麗奈は俺にとっての天使なのか、悪魔なのか。

これではまるで……まるで俺とはセックスだけをしに会いにきたようなものだ。それができたから、もう用無しということなのだろうか。

そういえば俺は失念していたが、性交の際、麗奈の陰部から血はでなかった。そういうこともあるのかもしれないと俺は思った。自慰の際にも破れてしまうものらしいし。麗奈が自慰行為をするのは想像できないが、彼女だって性欲をもった女なのだ。いや、俺はたぶん認めたくなかったのだろう。彼女は俺と付き合ってたとき処女だった。確認したことはないが、キスは初めてだと言っていた。

彼女はどこか手慣れていた。俺とする前から彼女は処女ではなかったのだ。

だが俺はそれでも一縷の希望を持つ。一時の過ちだ。心はずっと、おれのことを求めている。麗奈は俺を好きなはずだ。だから連絡もなく東京に戻ったのにも、何か理由があるはずだ。

だがそれ以来彼女から連絡はない。

## きゅう

傷心の俺に美伽も工藤先輩も優しかった。俺は彼女達に甘え、そして俺は二人のことが気になっていた。美伽も可愛いが、俺は工藤先輩のことが好きになっていたようだ。彼女が笑うと俺は最高の気分になった。そんな彼女と共にいて、俺は再び心から笑えるようになった。麗奈のことを考えるとまだ心は痛むが、時が解決してくれるのだろう。

そして三ヶ月ほど経った。今日は美伽とドライブに出掛けた。美伽とはいろいろなことを喋ったが、いつもより不機嫌だった。理由はわかっている。美伽は俺が美月と自分どちら共と遊んでいるのが気に食わないのだ。

「美伽って剛のなんなの？」

勾配のない緩やかな林道を走っているときに彼女がそう聞いてきた。この質問は想定していた。だから俺は特に動揺しない。

「大事な存在だよ」

まあまあな返事だろうと思った。自分の恋人とは一言も言っていないが、そうでないとも言ってない。

「ふぅん」だが美伽は不満そうだ。嫌な顔だ。女のふて腐れた顔など見たくない。

「なんだよ？」

「別に。じゃあ美月先輩はどうなの？」

俺と工藤先輩は今では剛と美月と互いの名を呼び捨て合う仲だが美伽はそのことを知らない。俺は美月とまだ正式に交際していない。美月も美伽がいるから遠慮しているところがある。こういう微妙な状況になったのは俺も悪いのかもしれないが、タイミングもまた悪いと自己弁護する。それに美伽だ。彼女はそろそろこちらの仲のよさに気付くべきだ。そして俺のことを友人として接して欲しい。彼女には世話になった。明るい性格は麗奈のことを忘れさせてくれた。

だが恋仲にはなれない。
「工藤先輩は関係ないよ」嘘をつく。
「そうかな」
「そうなの」
微妙な空気が続いた。俺は運転しながら、なんだか調子が悪くなってきたなと思った。吐き気がするし、息苦しい。俺は気分の悪さを訴え、ドライブをやめて美伽を家まで送ると急いで自分のアパートに向かった。気分が悪かった。軽い嘔吐感が、だんだんとエスカレートし、立つこともままならなかった。俺は車を止めて外に出た。そこは近所の公園だった。公園によろめきながら向かった。変だった。自分が自分ではなくなるような気分。俺はたまらずその場に倒れた。

## じゅう

気付くと朝になっていて、俺は自分の部屋にいた。なんだかよくわからない。気分があまりよくなかった。大学は休むことにした。キッチンに行き、コップに水を注ぐと一気に飲んだ。
鏡面に映る俺の姿はおかしかった。目が真っ赤なのだ。俺は驚いて悲鳴を上げた。
なんだこれは？　まじまじと自分の目を見る。よく見ると歯もおかしい。吸血鬼のように長い牙が生えている。
本物の牙だ。映画のような、長い牙。
馬鹿な。
俺はどうなってしまったのだろう。昨日はハロウィンだっただろうか。いや……今は真冬だ。
俺が呆然としていると、目はだんだんと赤みが消えていき、元の黒い瞳のある目に戻った。牙もどういうからくりか、引っ込んでいく。そして口元も普通になった。
どういうことだろう。数々の疑問が湧くが、真っ先に思い浮かんだのは三ヶ月前に部屋の窓の外でみたあの光景だった。化物の赤い目、鋭く牙。
あれだ。あの光景。あの化け物とさっきの自分は似ていた。だが俺はあんなに毛深くなっていないし、色々違いはあった。なんなのだろうか。怖くなった。病院に行くべきだろうか。だが症状はと聞かれたらなんと言えばいいのだろう。
病院には行けない。行っても無意味だ。
メールだ。美伽からのメール
具合悪いの？　また野犬の被害があったみたい。気をつけてね。
返事をだす余裕もなかった。どうすることもできないまま、夜を迎えた。風呂に入った。湯に浸かっていると唐突に昨日と同じような気持ち悪さに襲われた。吐き気を催し、風呂から出てすぐに倒れ

た。それから起き上がったが、自分の視界が妙だと感じた。やけに不鮮明で、見えにくい。しかし感覚は研ぎ澄まされていて、特に嗅覚と聴覚が凄まじく、いつもは感じない匂いがし、風呂場の水滴が落ちる音がいつもより遥かにはっきりと聞こえる。

なんだろうなこれは。努めて落ち着こうとするが、不安は肥大化し、頭の中は狂乱でのたうっていた。

落ち着け落ち着け、俺、と自分を落ち着かせようとする。しかし、駄目だ。冷静さなんて生まれるはずがない。自分が吸血鬼か何かになったような、いやそれ以上にわけのわからない化物になったような気分だった。

唐突に昨日の情景が蘇ってくる。俺は公園で倒れ、何かになって起き上がった。自分の体を見下ろしている。毛むくじゃらのその姿はまさしく化物だった。自分が叫んでいるとは思えない、凄まじい雄叫びだった。

いやいや。首を振る。ありえない。なんだこれは。だがその記憶は鮮明に脳裏に焼き付いている。そこから先の記憶は思い出せない。

大学を休み、寝ることにした。寝れば全てが解決するはずだ。きっと、何もかもが元通りになる。そうであればいいが。

俺は起きた。夜になっていた。随分寝てしまったなと思い、携帯電話を確認しようとして、自分の手にびっしりと毛が生えていることに気付いた。慌てて鏡を見て姿を確認する。そこには全身毛だらけで、猫のような耳を生やした醜悪な姿があった。目は真っ赤に赤く、瞳孔は縦に長細かった。

俺はよろめいた。理性がだんだんと消えていくのがわかった。体を本能に蹂躙されるような感覚。俺は窓を開けるとそのまま三階から飛び降りた。

## じゅういち

気がつくと朝だった。俺は自室で布団に包まっていた。気分は普通だった。

起きる。なんだか口の中が妙な臭いがする。変なものでも食べたのだろうか。

携帯電話を確認する。メールと着信が数件。美伽と美月からだ。どっちもおれが休んだことを心配している。美伽はまた野犬が現れて人を襲ったから気をつけてと忠告してくれた。

そして美月は……美月のメールは、化物に襲われたというものだった。

慌てて美月に電話してみた。美月はすぐにでた。

「もしもし……剛君、大丈夫なの？」

「ああ。俺は大丈夫。それよりそっちは大丈夫なの？」

「うん、今はね」

「怪物って？」

美月は昨夜、買い物帰りに抜けると近道の公園の中で怪物に襲われたという。怪物は全身毛むくじゃらで、犬なのか猫なのかわからない容貌をしていた。それが人間のように直立で襲ってきた。しかし怪物は途中で立ち止まり、思いとどまっているようにも見えたという。隙をついて美月は逃げることができた。

「怖かったけど、怪我はないよ。でも本当に怖かった。あれってなんなんだろ」

夕べのことを思い出す。俺は公園にいて、近づいてくる足音を聞きつけた。それはとてもいい匂いがした。知っている匂い。すると俺はその相手を滅茶苦茶にしてやりたくなった。喉笛に噛みつき、息の根を止めて骨まで食らいついてやりたくなった。

顔をみたとき、それが美月だとわかった。だから俺は、自分を抑えようとした。彼女を襲いたいという強い欲求と戦ったのだ。結果

的にそれで彼女は逃げることができた。
「美月が無事でよかった。後で大学で」
電話を切り上げると放心した。
化物は……俺だ。
そして昨晩、美月以外にも人を襲ったことを思い出した。一瞬、ちらつく。女の顔。驚愕の顔。そして、俺の手が喉を払う。鋭い爪を生やした俺の手が。
口から血の味を感じ、すぐにトイレに駆け込むと盛大に吐いた。
そして俺は困惑し、泣いた。

結局その日も大学を休み、胡乱な状態で部屋に篭っていた。昼になると、また夜になったら化物になるのだろうかと怯え、このままではと家を出た。
何で俺が化物に……しかし、あることに思いあたった。俺の変貌は、麗奈と何か関わりがあるのではないか。
人気のない舗道を歩いていると俺は何かの気配を感じとった。誰かの強烈な気配。
「動くな」
背後から冷たい感触を感じた。おそらく、ナイフだ。
「誰だ」
「狩人だ。お前を殺す」低い、男の声だった。
「何故！」
「お前は人を殺した。女子校生だ。そろそろニュースになるだろう」
昨晩の自分の記憶の中の映像を思い出す。吐き気が再び込み上げてきた。
「俺はお前のような化物を嗅ぎ分けることができる。お前は猫又だ」
猫又。猫又とは確か、猫が年降ると妖怪になるという妖怪の名前ではなかっただろうか。尾が何本もあり、人間に化けて悪さをする。
「俺が妖怪？」
「そうだろう？　気配からいってまだ変貌して間がないようだが。

誰にもらったかはわからんが、もう相手の女は化物ではない。これは人から人へ移すことができるからな」
「ちょっと待ってくれ。なにを言っているのかわからない」
「知る必要があるのか？　お前は死ぬんだよ」
冗談じゃない。俺は美月の笑い顔を思い浮かべる。恋人がいるんだ。こんなところでわけがわからないまま死ねるか。
俺は振り向きざま相手を蹴り飛ばす。男がよろめく。男は色黒のまだ二十代の若い男のようだった。男がよろめいた隙に逃げる。脚は驚くほど早く、自分でも驚いた。

かなり走った。もう大丈夫だろう。俺は男が言った言葉を思い出していた。これは人から人へ移すことができる。相手の女。不気味な予感にとらわれて、麗奈の家へと向かった。
麗奈の家の前に立つ。チャイムを押すと麗奈の母親が現れた。俺を見ると不審そうな顔をした。俺は麗奈の部屋に忘れ物をしたと半ば強引に上がり込んだ。
麗奈の部屋。もう彼女はここにはいない。本棚には固い文学小説と、少女コミックがある。
机をみる。引き出しの全てを開ける。プライバシーなど知ったことか。
俺は引き出しの中にあった一つのノートを手にとった。ノートにタイトルは書いてない。パラパラとめくる。綺麗な長々と何か書かれてある。猫又という名前が文の中にあった。俺は慌てて一番初めページに戻り、読んでみた。大半はくだらない日々のつらつらとしたことを書いている。間違いなく麗奈の文章だ。俺の知らない東京生活での様々なこと。彼女は随分、楽しくやっていたように見受けれた。案の定、向こうでは男がいたようだ。腹立たしいが、それを抑えて先を読む。そして、興味を引く一文を見つけた。

## じゅうに

私の彼氏は猫又だった。私は、彼と性交し、彼に猫又の呪いを譲り受けるになった。彼は失踪し、私は途方に暮れた。夜な夜な私は徘徊し、残忍で非道な行為に及んだ。私は自殺を考えた。これ以上人を傷つけたくなかった。

その頃は猫又のことも、猫又の呪いを移されたことも知らなかった。新しい彼氏ができたときも謎の男――狩人だと名乗る男が現れなければそのまま体を重ねていただろう。

狩人は私を殺しにきたようだが、私を見て気が変わったようだ。私の体をまさぐり、性行為がしてみたいという様子がありありと表れていた。彼は他の男に呪いを移せばいいといった。そしてその後俺に体を好きにさせろと。何回か体を自由にさせれば私の元を去ると言った。最低な奴だと思ったが命は見逃してもらえるようだった。

これは性交によって、他者に化物となる呪いをを全て移すことができる呪術だと狩人と名乗る男は言った。大昔から続く呪術師の呪いだと。猫又はそもそも人に化物を憑依させ、そしてその力を用いて敵を倒す、自身を増強させるための呪術だった。これはその呪いが失敗したものらしい。あるいはそれを奇妙な呪いとして改良したのか。何時の間にか性交を結んだ者に移して回るようなより異様なものへと変貌してしまったようだ。夜だけ化物になり、理性をなくし、人を襲って食い殺す。自分の知っている者ほど襲いたくなるようだ。

私に拒否権はない。彼はこの世の化物を殺す権利を国から与えてもらっているようだ。彼のような狩人は日本にかなりいるらしい。俄には信じがたい、嘘のような話だが私自身が現に化け物なのだ。きっと本当なのだろう。

私は迷った。体を重ねれば相手の男を猫又にし、自分は解放される。しかし私が現時点で性交をできる異性は恋人の彼だけで、私は

彼に怪物になんてなってほしくなかった。彼を愛していたから。
そこで私は昔の男を利用することにした。男といっても、交際していたが性交にすら至っていない相手だった。だが彼ならばよい身代わりになってくれるのではないだろうか。まだ私のことを想っている可能性もあるし、性交に至れる可能性は高い。
そして私は帰省し、彼と再開した。その前に猫又の状態で彼のアパートに訪れるという失態をやらかしたが、危ういところを獣性を抑えてその場を離れることができた。何度か近所の人間を襲ったが、それもすぐ終わるはずだ。
昔の男とのセックスへのプロセスは容易で自分でも驚くほど簡単に事に至れた。性交した夜、私は猫又にはならなかった。最高の気分だった。すぐに東京に戻ろうかと思う。だが狩人だと名乗る男に体を弄ばれることを考えると気が滅入る。彼はたしか、怪物の気配を感じとるはずだ。ならば、もうわたしの気配は感じ取れないかもしれない。私はもう化け物ではないのだから。帰ったら急いで引っ越しの手続きを取ろう。私は嬉しかった。これで今の彼と深い関係になれる。私はもう化け物にならない。全てが丸く収まったような気分だった。

俺は家に戻った。ノートは一応拝借しておいた。ショックだった。とにかくショックだった。
ここにいて大丈夫だろうか。またあの狩人と名乗る男がやってくるかもしれない。
チャイムが鳴った。
気配は感じない。俺の中の獣性がそれを敏感に感じ取るのだろう。玄関を開けると美月がいた。美月は俺を見るなり抱きついてきた。
「大丈夫か？」
「会いたかった。なんだか不安で」
俺は美月を抱きしめた。彼女は震えている。そして震えの原因を作ったのは俺なのだ。

俺は彼女にキスをした。
「美月は大丈夫。俺がついてるから」
美月は笑う。「ちょっと優柔不断なナイト様、か」
俺は彼女の頭を優しく撫でた。
美月の潤んだ瞳は、俺に性的行為を想起させた。彼女としたかった。しかし、彼女は危険だ。ここにいてはいけない。
「美伽のことも心配なの」
「美伽がどうしたの」
「あたしに、剛にちょっかい出すなって」
「馬鹿馬鹿しい。俺の彼女は美月なのに」
「でも向こうだって剛のことを好きなんだよ……ねえ、そろそろ頃合いでしょう？　美伽に伝えないと。最近彼女の雰囲気、なんだか怖い」

## じゅうさん

美月をなだめて帰らせる。滾るものを抑え、俺は早く今の自分の状況をなんとかしないといけないと考えた。

性交をすれば、この奇妙な病気から解放される。

だが誰と……。　そうだ。風俗だ。風俗に行けば、金さえ払えばセックスができる。

だがいいのか？　俺は思う。見ず知らずの女をわけのわからない化け物にさせていいのだろうか。

麗奈はやった。知っている男を、昔の交際相手を。俺は彼女の倫理観をとやかくいうつもりはない。ただただ、哀しいだけだ。今となっては。

だがどうする？　このままでは……。時計は四時を指している。まだ早い時間だ。

携帯電話が震える。俺は電話を取った。

「剛？」美伽の声。

「ああ」

「今アパートの階段上ってるの。いるでしょ？　電気ついてるし。鍵開けといてよ」

俺は奇異に思いながらも言われたとおりにした。

扉が開いた。外は雨が降っていて、美伽は少し濡れていた。

「大丈夫かよ」

「濡れちゃった。シャワー借りるね」

美伽は返事も待たずに風呂場に向かった。

一体なんなのだ。俺は戸惑う。突然邪魔してシャワーを浴びにくる。完全に彼女気取りだ。だが風呂で裸体でいる彼女に対し、性的欲求を感じないかというと嘘になる。先程の美月との触れ合いで俺は滾っていた。風呂場にこっそり行き、彼女の下着を見る。美伽とはそういう関係になりたくない。いや、そういう関係だけにしかな

りたくないというべきか。セックスはできる。情けないが、下着を見るだけで興奮する。
だが美月の顔を思い出す。彼女を傷つけたくないし、俺も彼女以外のことはもう考えたくない。
彼女が出てきそうだったので俺は慌てて居間に向かった。
「剛はお風呂入ったの？」
「いや。あとでいいよ」
「あっそ。ま、どっちでもいいんだけどね」
近づいてくる彼女は下着しかつけていなかったので俺は驚いた。赤いブラジャーに隠れて豊満な乳房が見える。実に形のいいものだ。スタイルのいい美伽の体に俺は思わず釘付けになってしまう。しかしすぐに冷静になる。
「服着ろよ」
俺の言葉には返事せず、近付いてくるとそのまま俺の顔を両手で掴み、美伽はキスをしてきた。濃厚なキスだった。
「いいの。今日は剛としにきたんだから」
「俺と？」
「セックスをね」
俺は拒否しようとしたが彼女は俺の股間を強くまさぐってきた。俺はたまらなくなってきた。駄目だ。こんなことをしていたら絶対に理性が飛ぶ。
再び彼女がキスをする。甘く柔らかい感触が俺の理性を削りとろうとする。
「先輩よりあたしのほうが剛にはふさわしいよ。絶対に」
最近の美伽は少し変だ。前はこんなに嫉妬深くなかった。
俺のせいなのだろうか。俺が美月と付き合っているとはっきり言わなかったから。
そのままベットまで行き、俺は押し倒された。彼女に手を掴まれ、ブラジャー越しに乳房を触ることになった。豊満ではある。華奢な体に不釣り合いな大きさが俺の理性をさらに削る。

ブラジャーが取れ、美伽は美しい乳房を露わにした。つんとすました乳首が魅惑的だった。俺はたまらずに乳房を鷲掴みにし、乳首を舐め、吸った。彼女の喘ぎ声がすると、俺の箍は完全に外れそうになる。

悪魔の囁きがした。――これはチャンスじゃないか。ここで最後までいけば、自分の呪いは解ける。

だが美伽が化け物になる。

俺はさらに、悪魔の囁きに耳を傾けた。――そうだ。こんなタイミングで求めてくる美伽が悪い。彼女が全部悪いのだ。

俺は服を脱ぐと肉欲の赴くままに美伽の体を求めた。

## さいご

その日の夜、俺は化物にはならなかった。

次の日、美伽は裸で隣にいた。

「あたしのこと好き？」

「ああ」

だが好意は愛にはならない。世界の誰よりも愛しているのは美月だ。だが美伽には世界の誰よりも感謝している。

「泣くほど好きなんだ」

彼女は微笑みながら俺の目元を拭う。俺は泣いているようだった。眼に手を当てると、確かに涙が出ている。確かに俺は泣くほど嬉しかったし、泣くほど自分が哀しかった。

美伽は美月に俺ととセックスしたことを伝えたそうだ。美月は泣きながら俺を罵り、俺は辛かった。美月も辛かった。だが全部俺が悪いのだ。最初から、彼女のことを好きになりかけていたときから彼女一筋でいればよかった。そしたらこんなことにはならなかった。麗奈と再開しても肉体を重ねることはしなかったかもしれない。

だが無理だろうなとも思う。俺は心の中では麗奈に心酔していた。彼女の裏の部分がわかった今でもどこかで彼女のことを想うときがある。

美月は俺と別れると言ってくるかもしれない。しかしそうはいわず、時間が欲しいと言った。

「二度とこんなことにはならない。俺は美月だけしか見えないから」

こんな台詞も今は何も伝わらない。俺は時間にこの問題を任すことにした。美伽とはなるべく会わず、メールも電話も無視した。

一週間後、狩人と再び遭遇した。色黒の男。まじまじと見ると本

当に若い。年は俺とそう違わないのではないだろうか。
「お前、違うな。もう化物を他の女に移しやがったな。まったく、クソ野郎め。俺のノルマ達成の邪魔しやがる。教えろ。誰とやった？」
俺は教えた。美伽のアパートの場所までも。性交した日にちすらも。俺は罪悪感を覚えたが、それもどこか薄いものだった。それどころか俺は怒りの感情すら湧いていた。俺のせいじゃない。あいつが悪いんだ。そう思いたかった。それが実に理不尽な感情だとしても。
「ところであんた、麗奈って知ってる？　東京にいる子なんだけど」
「いや。俺はこの県担当だし、東京には数年行ってない。その女にもらったのか？　復讐はやめとけ。碌なことがないからな。お前が最近やった子は可哀想だけど、ゲームオーバーだ。その子に感謝することだな。おかげで死なずにすんだ」
どうやら麗奈のところにいた狩人とは別人のようだった。
「お前は運がよかった」
狩人はそう言うと去っていった。

夜、窓の外で何かの気配を俺は感じた。叩く音も聞こえる。しかし、俺は絶対にカーテンを開けることはなかった。美月は自分の部屋にいる。大丈夫。外には出ないようにと言っておいた。また獣が現れたから、念のためと理由をつけて。
音はしなくなり、そして俺は獣の悲鳴を聞いたような気がした。俺は窓の外を見ることはしなかった。

次の日、美伽はいなくなってしまった。大学にもこない。突然の失踪だった。
「剛は何も聞いてないの？」美月が心配そうにしている。最近はまた話すようになってきた。
「わからない。だけど俺たちのことは関係ないと思う。彼女とはキ

レイに別れたんだから」
「美伽、剛と別れた話なんてしてなかったけど……」
「そもそも俺は美伽と付き合ってないよ。彼女の思い込みだよ。あのときだって無理やりだったんだ。ほんとだよ」
「やめてよ。美伽に何かあったかもしれないのに、悪く言わないで」
しばし沈黙。少しまずかったかなと頭を掻く。
「悪かった。だけどこれだけは覚えておいて。俺が好きなのは、美月だけだ」
数日すると美伽の失踪も話題に上らなくなった。俺と美月は再び恋人同士になり、キャンパス内でも周りに人がいなければしょっちゅうキスをしたりしている。
美伽の話題に時折美月は触れてくる。まだ気になるようだ。
「人ってすぐに過去を忘れちゃうんだね」そういう美月は悲しそうな顔をする。
「そうしないと辛いことばかり増えるからね」
俺は彼女の頬をやさしく撫でた。
「だけど俺も美月も美伽のことは忘れない。そうだろ？」
その夜、俺たちは結ばれた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1072x/

化猫

2011年10月1日02時43分発行